



Title	近代における中日語彙交渉についての研究
Author(s)	沈, 国威
Citation	大阪大学, 1993, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/29170">https://hdl.handle.net/11094/29170</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	沈 国 威
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 0 5 0 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 5 年 2 月 1 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科 日本学専攻
学 位 論 文 名	近代における中日語彙交渉についての研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 助教授 土岐 哲 (副査) 教 授 宮島 達夫 教授 前田 富祺

## 論 文 内 容 の 要 旨

十九世紀末、日本は中国に比して西洋文明の吸収に先行し、近代国家に変身した。それに対して、中国は、まだ「近代」の入り口で低徊していたが、この近代化の格差によって、中日両言語の間に、顕著な語彙の逆流がもたらされ、日本で造り出された、漢字による新語・訳語が大量に中国語に入り込んだ。

本論文は、このようにして中国語に流入した日本語からの借用語について通時的な考察を加えようとしたものである。

本論文は、全体で研究編（序章、第一章から第五章）、語誌編、資料編に分かれる。研究編と語誌編とで867枚（400字詰）、資料編が179枚（400字詰）、併せて1,046枚の労作である。

序章では、まず、本研究の基本姿勢と本論文で扱う範囲について述べる。従来の外来語研究においては、一般的に文化史的な意味から論じられる傾向が強かったが、本論文では、漢字による新語（訳語を含む）造出のメカニズムや表意文字としての漢語の異言語間の移動・受容の過程を、言語接触（language contact）という観点から解明しようとする。

本論文では、アヘン戦争勃発（1840年）から、新文化運動（五四運動、1919年）を経て、第二次世界大戦終結までの「近代」に発生した中日両言語間の語彙の借用を中心に考察が進められている。この百年間を、本論文では「近代」中でも、アヘン戦争から日清戦争終結（1895年）までを近代前期、その後を、近代後期と規定している。これまでの近代語に対する考え方と異なり、洋学語彙の出現によって中国語は前近代的なものから近代に入り、日本語からの語彙の参入によって、少なくとも語彙面においては現代中国語への変身を成し遂げたと論じる。

第一章の「日本語借用語研究概説」では、まず研究の方法論について述べる。主に、（１）日本語借用語の定義とその外来語としての特殊性について、（２）研究対象としての日本語借用語を中国語全語彙中から選別する方法について、及び（３）日本語借用語に関する調査、考察の手順について、などの問題を取り上げる。

日本語語彙の中国語への流入は、言語的事象の一つとして先人により、早くから注目されてきたが、日本語借用語を研究の対象として厳密に規定し、研究方法を示すものは、従来見あたらない。異言語要素の借用という観点から、

日本語借用語の特殊性は次の二点に集約できる、と主張する。

1. 音声の借用を伴わない。従って、他の外来語研究における音転写及び、その過程に起きた一連の音韻的現象は、日本語借用語研究において、考察の対象とはならない。また、一般の外来語研究で行われる、音声を手がかりに語の出自を追究する方法は適用できない。
2. 日本語借用語は、日本の在来語ではなく、近代以降の訳語・新漢語が中心である。またその形成のプロセスにおいて、従来の漢字造語法、十九世紀の英華辞典類の訳語法などが大いに活用された。ここに中国語が日本語の語彙を借用する具体的可能性が潜んでいる。

日本語借用語の選別にあっても、存在する文献資料をすべて調査する語彙検索は基本的な方法であるが、資料の膨大さと語彙の多さを考えれば、別に、より効率的な選別法をとることも必要であろう。そこで第一章では、両言語の造語法、用字法における違いによって、能率的な選別法が可能かどうかについて議論を展開させ、これまで必ずしも明確に認識されていなかった漢字造語法上の幾つかの問題に、異言語交渉の角度から新しい解決法を示している。

第二章「日本語借用語の研究史」では、日本語借用語研究の歴史について述べる。本論文は、日本での研究はある程度知られていることから、特に中国側の研究の歴史と現状を重点的に紹介している。

中国では、五四新文化運動（1919年）以降、日本語借用語について、個別的な考察が現れ、また1956年、中国の国語改革運動の中で、一部の研究者はこの問題について論文を発表しはじめたが、政治的な理由によって挫折した。本章では、このような断続的な研究の歩みを辿り、その成果と問題点の分析をしている。

第三章「日本語との出会い―近代前期の場合―」では、明治維新前後に日本を訪れた中国人の日本に関する著述に使用された語彙について考察している。

日本製の訳語・新漢語が中国へ逆流入し始めた時期については、日清戦争敗戦（1895年）後というのが、これまでの通説であった。一面の真実をついているが、しかし、幕末・明治初期から、文人、役人らによる交流が既に活発に行われており、それに伴う語彙借用の萌芽は書籍などにおいて実際に存在していた。この日本語借用の前段階と称し得る時期の交流は、これまでの研究ではほとんど無視されてきたが、第四章で取り上げる洋学資料と共に、その実態の究明は日本語借用語の研究にとって非常に重要であると説く。

その具体的根拠となる資料として、中日両言語の近代語彙研究ではこれまでほとんど問題にされなかった羅森の『日本日記』（1854）、何如璋等の日本紀行文、日記類（1877）、葉慶頤の『策鰲雜摭』（1889）、黄遵憲の『日本国誌』（1879）などを取り上げているが、特に葉慶頤の『策鰲雜摭』には『事物異名』の巻があり、まとまった日本製の語彙と意味説明が示されており、資料価値の高いこれらの文献について詳しく考察している。

これらの資料についての考察・分析によって、近代前期（1840-95年）における中国知識人と日本語との遭遇の実例を観察することができ、また、このような接触によって生じた日本語の中国語への流入の可能性や（中国人の）新しい漢語を理解するメカニズム、漢語借用に関する言語学的原理など、多方面にわたって有益な示唆を与えている。

第四章の「西学東漸と日本語借用語―英華辞典を中心に―」では、日本語の借用の背後に、西洋文明の東漸という歴史的な流れがあった点に注目する。十九世紀のはじめ、プロテスタントの宣教師が渡来し、中国での布教を再開した。十九世紀末まで、宣教師の手によって出版された外国語と中国語との対訳辞書は、夥しい数にのぼる。これらの辞書における訳語は、日本の英和辞書の訳語の成立や近代語彙の発達にも大きな影響を与えた。本章は、第三章と共に最も力のこもった部分である。ここでは、日本側の国語学的研究とは逆の方向、即ち中国近代語彙史の角度から、洋学の側面である英華辞書類の訳語と、日本語借用語との関わりについて考察が加えられ、両言語の近代における西洋言語をめぐるなされた語彙上の交渉の事実を浮き彫りにした。

日本語借用語の研究において、英華辞書類をはじめ、宣教師たちや西洋諸国との交渉に携わった中国の役人や文人による洋学資料の価値と重要性は、必ずしも認識されていない。ことに中国の学界では、現在のところ洋学資料を利用する研究は、皆無に等しいが、本論文では近代前期の洋学資料を視野に収めることにより、日本語借用語研究を大幅に発展させた。

本章ではまた、具体的に、（1）近代の訳語・新漢語の形成に最も大きな影響を与えたロブシャイドの『英華字典』

(1866-69) についての書誌学的な考察、(2)『英華字典』の訳語と日本語借用語の関連、(3)キリスト教用語と日本語借用語の関連、(4)英華辞書の限界、(5)英和辞書の役割について、などを論じる。

(1)については、筆者が新しく発見した資料の分析により、『英華字典』の編者、編纂過程、訳語の考案などについて考察している。

(2)では、『漢語外来詞詞典』(1984)において日本語借用語と認定された百余語を取り上げ、『英華字典』の訳語と照合して、同外来詞詞典の語源に関する記述の誤りを指摘している。

具体的事例研究として、「鉛筆」の出自については特に一節を割き、その訳語としての造出、流布について考察を加え、先行研究の誤りを訂正し、新しい語誌記述を示すと同時に、本研究における洋学資料の重要性を力説している。英華辞書類を初めとする洋学資料の利用をめぐって、本章の記述は、将来の近代中国語彙形成史に対しての一つの範例となっている。

第五章の「中国語における日本語の受容について」では、中国語がどのように日本語を受容し、それが中国語の語彙体系にどのような変動をもたらしたかという問題を中心に据え、「関係」という語、及び意味的にそれと近い「影響」「関渉」「干係」「干涉」「交渉」等の語について、語誌的考察を加える。

これによって、次のようなことを明らかにしている。即ち「関係」と「影響」は、共に中国古典語であったが、現在の意味とは違っていた。幕末・明治初期、日本において「関係」は、consequence → relation ; 「影響」は、shadow & echo → influence という意味の変化があって、新しい訳語として成立した。そしてこの新訳語は、明治後期の両言語の交渉によって近代中国語に将来された。そして、「関係」の同義・類義語群を中心に、近代中国語の語彙体系に少なからぬ変動をもたらした。

この章では、また「関係」「影響」について、厳密な語誌記述を行うと同時に、「語彙の場の理論」を運用して、上記の意味変化は、孤立的な現象ではなく、組織的な変動であると論じ、異言語の干涉による意味変化のメカニズムと語彙借用における一般原理の解明に努めている。

これまで中国の研究においては、どの語が日本語借用語であるかとの指摘、いわば日本語借用語の語彙リストの提示にとどまっており、流入のルート、時期、定着、意味変化などの借用プロセスを含む実証的な研究が展開されていなかった。しかも語彙体系に対する鳥瞰的な視点が欠けていたと言わざるを得ないのであるが、本章では新しい視点から、近代における両言語の語彙交渉の一断面を具体的に示している。

語誌編では、現代中国語に流入してきた明治期に日本で作られた新漢語、訳語を、97語取り上げ、語の発生、及び中国語へ流入した際の諸事清 — 流入のルート、時期、定着の仕方、意味の変化 — について考察を加えている。取り上げた語は、これまでの研究において十分に解明されていなかったものばかりである。これらについて中日双方の資料を駆使して、語誌記述を試みている。語数は必ずしも多くなく、記述も更に完璧を期すべきところがあるだろうが、今後『日本語借用語辞典』の編纂への進展が期待される。

資料編では、いままで中国において発表された研究の語彙リストに、語構成分析等を加えて掲載している。リストに挙げた語について、語源上の問題点を、関係資料にあたりながら、注釈を付すという形で示している。更に、論文資料集、索引類等を調査して、本研究に関する参考文献、資料を網羅的に納めている。また、本文中の事項、語彙に関しても、索引が付されている。

## 論文審査の結果の要旨

「漢字」を媒介にしての西洋で形成された概念の受容が、言語を越えて中国、日本等で試みられたことに関して、近代漢語の交流史を考察し、その汎言語的一般事象から個別言語の特殊事象までを詳細に吟味することは、「漢字」という特色のある文字の本質に迫り、その造語力や漢語の将来へ向かっての可能性を解明するうえで、重要な意味を有するものである。従って、日本語借用語に関する研究は、単に中国語近代語彙史、翻訳史、訳語史の研究に対して

のみならず、日本語の近代漢語研究にも大きく寄与するものである。

しかしながら、中国では、種々の原因により、この方面の研究が本格的に行われておらず、日本でも近代漢語については、日本側の資料にもとづく研究成果が出されてはいるものの、中国側の資料による研究・分析は十分ではなかった。十九世紀の半ば頃までの近代化の流れの中での日本における漢語の造出が、中国語（伝統的語彙と洋学語彙）から大きな影響を受けた事実を考えれば、中国側資料の運用及び言語交渉の視点の導入は、日本の近代漢語研究にとって不可欠なことである。本論文の筆者は、中国人である自己の立場や中日両言語を自由に使える利点を十分に生かし、中国と日本の資料を広く駆使して考察を進めた。本論文は、この課題に関する最初の本格的な研究として、中国側の空白を埋め、新しい展望を開いただけでなく、日本の近代漢語研究に対しても大きく貢献したと言える。まず、方法論の樹立が注目される。詳細を極めた個別的語誌記述は、漢語研究に対する絶大な貢献であると評価することができ、抜群の成果が得られたものであると考えられる。漢字を媒介とする特殊性から、一般的な借用語研究・外来語研究に対して、新しい知見を加えるものとして特に注目される。

本論文には、しかしながら、この分野における中国人の手になる最初の本格的な研究であるだけに、残された問題もある。日本語借用語に関して、近代前期の考察には大きな成果を上げているが、近代後期に関しては新しく開拓していかねばならぬことも多いのではないかと考えられる。近代後期に関する文献は非常に多く、今後期待される分野である。

第四章のような宣教師による辞書、訳書、教科書、新聞・雑誌などの洋学資料については、かなり研究を進めているが、資料の膨大さ故に、更なる調査によって明らかになる点もあるであろう。また、中日両言語の交渉という限られた分野の問題を借用語の一般理論の適用によって処理しようという意欲は貴重であるが、現在の段階では、丹念な事実の考証と借用の方法論とが十分にかみ合っていないような印象を受ける部分も見受けられる。しかし、これらは、まさに筆者の研究が高い水準にあり、特に中国側からの視点という点で画期的であるがゆえに生じる希望であり、期待である。全体として言えば、本論文は日本語借用語研究に関して、一定の方法論を打ち出すとともに、実証的考察においても成功をおさめている。これまでの日本側の研究では、中国側の資料について不十分なところが残されていたが、本論文ではその点をよく補っている。のみならず、中国語と日本語双方に精通している筆者は、双方の資料を効果的に駆使して総合的に論文としてまとめあげた。その成果は十分に評価されるべきである。

以上述べたように、本論文は、日本語借用語研究の基礎ともなるべき優れた研究であると判断する。本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位請求論文として、十分に価値のあることを認定するものである。